

情動の痕跡を辿る：ぬいぐるみと愛好家へのインタビューから

宮脇かおり・間瀬巧（桃山学院大学）

発表要旨：

情動とは、「触発する外部の物事の本性と触発された身体の本性とをともに含む痕跡としての像＝観念であり、そしてこの像と観念がかたちづくる心身の状態の持続的継起からなる変様」である(伊藤 2017, p.37)。この定義に従うと、情動は我々が外部からの刺激を意識化や言語化（記号化）する前段階に生成されていると措定される。無意識の領域にあると考えられるものを、どのようにすれば捉えることができるのであろうか。これが本研究の根本的な問いである。

我々は、情動を直接言語化することができない。しかし、その痕跡ならば知覚することは可能ではないか。ではその痕跡とはどういったものなのだろうか。本発表は、ぬいぐるみと人とのコミュニケーションで情動が生起していると仮定し、その痕跡をぬいぐるみ愛好家へのインタビューを詳細に分析することで辿る試みである。

SNS 等で参加者を募り、これまで成人のぬいぐるみ愛好家 12 名に 1 時間程度の半構造化インタビューを行ってきた。ぬいぐるみと対峙する際、愛好家たちはことばだけではなく、対人間とは少し異なる形での触る、見つめる、匂いを嗅ぐなどの様々なコミュニケーションを行う。インタビューの際にも、ぬいぐるみとの非言語コミュニケーションが多々観察された。これらの言語化されないコミュニケーションは、家族もしくはそれ以上の存在であるぬいぐるみに対する情動の痕跡であると仮定し、そこを手がかりに情動の有様を描写することを目指す。

知覚できないものを知覚しようとするのは非常に困難な試みであるが、不可能ではない。例えば脳科学者のカンデルは絵画鑑賞という行為に無意識の情動が関わっているとし（カンデル 2017, p. 316）、無意識を研究する可能性を提示した。また、四方田(2006)は著書『「かわいい」論』で、それまで曖昧であった「かわいい」という概念を多様なテキストから抽出し、「神聖さや完全さ、永遠と対立し、どこまでも表層的ではかなげに移ろいやすく、世俗的で不完全、未成熟な何物か」とであると説明した。本研究は、ぬいぐるみという、ふわふわとした形状やこちらを見つめているかのような瞳が、人間に「抱きしめたい、話しかけたい」と思わせてしまうという特性（アフォーダンス）を持つモノであると理解し、ぬいぐるみと人とのコミュニケーションを分析対象として、愛好家たちの身体内で「言語化できないけれども確かにあるであろう情動」を間接的に描写する。

参考文献

伊藤守(2017)『情動の社会学』青土社

カンデル・エリック・R.(2017)『芸術・無意識・脳：精神の深淵へ：世紀末ウィーンから現代まで』須田年生・須田ゆり訳 九夏社

四方田犬彦(2006)『「かわいい」論』ちくま新書